平成２８年度

第２回学校評議員会議

学校評議員（外部評価委員）
北海道社会福祉事業団白糠学園長高井準人様
白糠町教育委員会指導室長中岡美緒様
白糠町保健福祉部福祉課長下重哲也様（欠席）
北海道教育大学釧路校准教授小渕隆司様
北海道白糠養護学校PTA会長上西春美様

概 要

１　日時　平成２８年１２月５日（月）１０：００～１２：００
２　場所　北海道白糠養護学校会議室
３　日程等
（１）　校長挨拶
（２）　日程説明
（３）　評議内容
①授業参観
②各学部の教育活動について
③今年度の取り組みについて（経過報告）
④学校評価について
⑤平成２９年度北海道肢体不自由教育研究大会について
（４）　第３回学校評議員会議の予定について
（５）　校長挨拶

白糠養護学校学校評議員議事録（要旨）

平成２８年１２月　５日

（教　頭）：おはようございます。お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。第２回北海道白糠養護学校学校評議員会を開催させていただきます。

（校　長）：おはようございます。本日２回目ということで、今日は授業を見ていただいたり、学部主事の方から学部の経営についてのお話をさせていただきます。ぜひたくさんのご意見をいただければありがたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

（教　頭）：皆様から協議等をいただいて学校の運営に反映させていこうと思います。

※　授業参観
※　「各学部の教育活動について」の説明
※　「今年度の取り組みについて（経過報告）の説明
※　「学校評価について」の説明
※　「Ｈ２９年度北海道肢体不自由教育研究大会について」の説明

（上西氏）：来年度の１１月に肢体不自由教育研究大会が開催されますが、例年この時期に参観日があります。どのように参観日の日取りをずらして実施するのかお聞きしたいです。また、白糠養護学校は元来、肢体不自由の特別支援学校ですが、先生方が行う研修の内容は、知的障害を対象とした取組ばかりとなってしまっているように見えます。知的障害と肢体不自由の重複児が増えているためそのようにならざるをえないのはわかりますが、現状に流されているのではないでしょうか。

また、保護者への連絡が少なくなってきているようにも思います。もうちょっと保護者の想いを汲み取って学校経営をしてもいいのではないでしょうか。キャリア教育もけっこうですが、その指導内容がどのようなものであったかなど詳細の報告が保護者に無いように感じます。担任との懇談の場などで、わかりやすく教えてほしいです。

（教　頭）：キャリア教育の件ですが、研究そのものは教職員向けのものですが、指導内容やねらい、計画などは個別懇談もしくは通信など日常的に保護者に伝えていくよう学部に伝えていきます。

（上西氏）：先生方が一生懸命やってくれているのは伝わっております。

（校　長）：参観日の件ですが、現在、次年度の年間行事を総務部で作成しており、１０月～１２月の間で、諸行事と、白糠学園さんとも調整して実施します。

（校　長）：教員の研修の件ですが、内容は肢体不自由教育の分野です。ですが、地域研修で参加者を募ると結果的に知的障害の応対機関の方が多くなります。来年度の北肢研の講師も肢体不自由教育専門の方です。重度重複の教育課程などについて講

義する予定です。先生方にとって有益な講義となるでしょう。

（髙井氏）：子ども達の学習の力がどれくらいあるかわからないところもあり、本人たちの力（表現力）の状況表のようなものがあればありがたいです。

また、町内で週１回小学生が中学校に行って授業を受ける機会があると聞きますが、一貫教育の観点から６年生が中学生の授業に出る機会が年に何回かあると、中学部に上がった時にスムーズに何をしてあげることがいいのかわかると思うので、ご検討いただければと思います。

（教　頭）：学習の力などの状況表の件ですが、個別の教育支援計画の一部に、自由記述という形で子ども達の学習力などの状況を細かく盛り込んでいるものがありますので、お見せすることは可能です。個別の教育支援計画の性質上、措置のお子さんはすぐに学園にお渡しできますが、契約のお子さんは保護者の同意を得る必要があります。

また、一貫教育の件ですが、回数は少ないですが小学部６年時に中学部の体験があります。今年度はこれから行う予定です。

（中岡氏）：白糠町が小中一貫教育に取り組んでいる中で、新たに出てきた課題として、特別支援学級の小中一貫教育のカリキュラムが必要ではないかというのが出てきましたが、子ども達一人一人違うのでカリキュラムを作成しても使えないんじゃないかという話が出ています。でも、本日参加させていただいて、小学校中学校通しての指導など見通しを持って教育課程のベースを作っていくのが大事なんだなということがわかりました。勉強させていただきました。

（教　頭）：本校の中でも課題はあり、整理していこうと思っています。児童生徒の実態からボトムアップでやっていく事が多いですが、学習指導要領や生活年齢などトップダウンの発想もないとうまくいかないところも出てくると思います。

（小渕氏）：特別支援教育が始まってほぼ１０年です。大学教員の中でも実態に合わせた、個に応じた指導がイコール「個別の指導」というイメージでここ何年か進んでいるイメージがあります。当然一人一人実態が違いますので、きめ細かな個々の指導は必要ですが、集団の中で個に応じた指導を行うという意味を明らかにしていかないと、一人一人別々にやればいいじゃないかということにもなりかねません。「頑張っている仲間を見て自分も頑張ろうと思う」といった、集団の中の指導という視点を入れながら、あるいは一人一人の課題は違いながらもそこに共通する事ですとか、一緒に学び合うということの共同性だとか、そういったことを追求していくことが必要だと思います。それが例えば、教え合う関係だとか、下級生に教えるという、仲間を意識しあうということに繋がるので

はないでしょうか。

共通した教育課程にオプショナルなものを取り入れていく、という考え方もあると思います。

（教　頭）：本校の教諭も生徒対生徒ではなく、教諭対生徒一対一という意識が強いところがあります。

（小渕氏）：児童生徒が、廻りが緊張している中でどのように気持ちを調整していくのか、が大事な所です。緊張をいろいろな環境の中でコントロールできるようにしていくかが一方での教育的課題としてあると思います。

（教　頭）：貴重なご意見を本校の職員に伝えて反映させていきたいと思います。

（校　長）：本日、評議員からいただいた意見をこちらのほうでしっかり汲み取って３学期、また来年度にどう児童生徒と向きあっていくか考えていきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。